

コンテンポラリーダンスの活動 にみる劇場／劇場外空間の関係

「収穫祭」プロジェクトを手がかりに

龍谷大学他非常勤講師 古後奈緒子

はじめに

コンテンポラリーダンスの作家の1990年代以降の活動の注目すべき動向に、劇場以外の場所を利用した上演や、地域コミュニティとの積極的な関わりにもとづく創作が挙げられる。モダニズム芸術の歴史に間欠的に現れるこのような劇場外への志向は、これまで劇場制度に対する批判や、特殊な場所における非日常体験の創出といった観点から論じられてきた。しかし、そこで前提とされた劇場と非劇場、日常と非日常といった線引きや対立関係は、都市空間や日常体験の変容により、今日もはや明確ではない。さらに、舞踊家が劇場外に赴く積極的な要因も、場所の特殊性だけでは捉えきれず、上演空間の創出に積極的に関与する観客の存在が重視される傾向にある。

このような変化を踏まえ、本発表は、現実の公演場所とそこで生み出される上演空間を、現代の実践に即して捉え直す基礎研究として、1996年から2003年にかけて展開されたダンスの出前プロジェクト「収穫祭」（主催：坂本公成）を取り上げた。同プロジェクトに注目したのは、それが継続して行われた劇場外活動の代表例であり、長期にわたる実践の中で劇場外におけるダンスの可能性をリサーチした発展的プロジェクトと捉えられることによる。

1) 劇場外に認められる意義—関係を孕む場所—

まずは、収穫祭の構想者、坂本が劇場外に認める意義の変化を見ておく。初期の関心を「日常空間に非日常の裂け目をつくる」とことと振り返る発言からは、劇場外が、ダンスが生み出した詩的空間をより際立たせる背景とみなされていたことがわかる。これに次ぎ、転換点とされる1998年の『芸術祭・京』で、通行人と結んだ関係から制作素材が得られたことを機に、劇場外は、創作に関する出会いを潜在させた社会的な場として捉え直される。さらに、ダンスの出前をプロジェクト化した2000年以降、美術館、ギャラリー、地域の集会所、個人宅など多岐にわたる出前先が「公／私」という概念で語られていることから、最終的な関心は、社会的な場所に集まる個人間やコミュニティにおける構成員の結びつき、および関係そのものに向けられていったことが示される。

2) 上演空間を生み出す手法—関係の再編—

次に、このような劇場外への関心の移り変わりと並行して、上演空間を組織する手法がいかに展開されたかを映像資料に見た。それによると、初期においては、即興を含むものの完結したレパトリーにより、その場で観客集団を組織するスペクタクル性の高い上演空間が形成される。'98年以降になると、振付の単純化に並行して遊びの要素を取り入れたレパトリーが加わり、ダンスの提示により引き出された観客の参加や応答を構成要素とし、上演空間は遊戯的な性格を強める。さらに、場所の性格やそこに集う人々の結びつきによっては、メンバーの提示に対する応答が観客／共演者の間で連鎖し、見る者と踊る者がたえず入れ替る社交空間が現れる。時期を追うにつれ、収穫祭メンバーが即興的に操作する進行は、観客の応答内容や参加行為を得ることではなく、このような応答関係を持続させること、かつその関係における役割を流動化し続けることへと方向づけられてゆく。以上のように、収穫祭の発展形においては、場所に集まる人々の関係は常に更新されてゆくが、その過程は、ダンスを見る／踊るという関心をめぐって展開される集団と個人の間の集合離散としても観察される。したがって、その場に集う人々の関係やコミュニティの結びつきを再組織する、つまり場所ごとに異なる関係を素材にそれを変化させることによって、収穫祭は、日常とは異なる秩序の支配する空間を生み出していると考えられる。

まとめ

劇場外とそこで生み出される上演空間を捉えるという関心に立ち戻るなら、公演場所を上演空間の基盤となる諸関係を潜在させた場所とみなす考え方は、劇場内外に等しく敷衍され得る。また、そこでダンスによって生み出される上演空間の特殊性は、最大公約数的な日常からの距離の大きさに負うのではなく、場をとにもする構成員の即興的な関係の再組織の過程に拠る。それは、場をとにもする者すべての関係に拠る祝祭空間や社交空間との類似において捉えることができるものであるが、手段や成立要件においては必ずしも一致しない。したがって、収穫祭が示したような上演空間の内実をさらに考察してゆくために、社会／共同体における個人間の関係と、上演芸術の美的体験がもたらす演技者と観客の間の結びつきを相関させ、動的に捉える理論的基盤を整えることが今後の課題となる。